

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	春蕾：創作
Author(s)	松本, 文雄
Citation	龍南, 228: 83-93
Issue date	1934-06-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7209">http://hdl.handle.net/2298/7209</a>
Right	

創作

春 蕾

松 本 文 雄

南國の都市は言ひ知れぬ香を持つ。それは美しい花の香でも爲ければ、綺麗な人の息吹でもない。唯懐しい抱擁の重壓である。山々の緑が呼吸するとき、人々は眞白な雲を眺める。そして眩くだらう、遠い昔の忘れ物が、何處かで兩手を擡げてゐる。ほろ／＼と鳴く躍動に、彼等は快い憂愁を感じる。人口から言つたら相當な此の町ではあるが、立並ぶ家屋の多くは、昔乍らの白い壁と、嚴丈な格子戸と、家號の入つた暖簾とを有する。三日間の秋祭りが昨日終つて、新しいくせに而も落莫たる希望が、こつそりと忍びよつてゐる。裏町といふ裏町には、殆ど人の子一人ゐない静けさである。氏神が貧しい人達に與へた一年一度の歡樂の日夜が過ぎると、そのデザートとして、眠りの一日が訪れる。でも、誰かが裏町を通つて見るなら、むせかへるやうな明日を味ふに違ひない。この町の人々は秋の明朗さなんて経験したことがない。強ひてそれを主張するなら、色の濃い、餘程變つた明朗性に外ならぬ。秋は春の前提であり——ひよつとしたら、春の方が秋の前奏曲かも知れない——生々しい慾望と、重苦しい衝動の中に、彼等は生を見出す。往々にして、反撥と逃避と追求とが一緒になると、喜び且つ自蔑する。悩みと喜びとが同意語の世界である。北から來た旅人達は、淫靡な空氣と、力強い人生と、そして、恐らくはみにくい人間の姿に陶醉するだらう。併し今日の空氣は輕やかである。太陽も、四日ぶりに自からの日を取返したかのやうに、無念無慾に、さんさんと光をそそいでゐる。珍らしく落ついた

午後が、すべてを覆ひかくして、動くものを素知らぬ顔で愛撫する。かうは言つても、大通りは流石に人通りが多い。街路には、小さな砂埃が渦を卷いてゐる。そして、日光は華かな舞踏である。

驛前の通りをすん／＼行つて、もう殆ど反對側の端に出さうな頃、古風な菓子屋にぶつつかる。近くに城趾のあるのと、随分廣い門口とから考へて、昔は斷然他を壓してゐた店だと思はれる。店の方はモダンな様式に造作變へされて、門口相應に大きい飾窓は行違ひの行はれた堂々さである。店と奥とを區切る暖簾の紺が未だ新しいのを見ると、その不自然さも大して氣に止められないで、最近新たに取替へられたものらしい。ガラス器の反射の中に、とり／＼の菓子がつとりと並んでゐる。その中のどれ一つとして人の食欲をそゝるやうなことはない。この家に相應しいどぎつい飽滿が秋の日をしつかりと喰ひ止める。この微動だにしない沈滞の中に、さゝやかな羽搏きをつゞけるものがあるやうだ。

賢吉は、客のゐない店先で一人ぼつねんと腰を下してゐた。雑踏と喧噪とが過去の思ひ出のやうになつた、あくまでものんびりした晝である。だが賢吉の心は、必ずしも空ろなのどかさではない。太鼓の音と笛の音と、喚聲と、酔つぱらひの愚痴と、甘つたるいさざめきを、聽官のみで、樂しむともなく樂しみ乍ら、別に突入したい氣にもならず、唯てんでこ舞ひしてゐた少年には、かすかな誇りがあつた。一人前の大人として、氣のきいた若い店員として、顧客に世辭をふりまくとき、何時も誇示したい自分を意識した、自分の身體に、自分の舉動に、軽く生意氣な様子がただよふのを希ひ、信じ、微笑む年頃だつた。一方第二樂章への躍進を試みる者によくある不安と焦燥が、踵へどころのない陰影を投ずる。その暗さの片隅に、これも亦漠とした欲求が賢吉をせきたてる。今も、それを無理強ひに具象化して考へ込んでゐるのは、遊戲と言へば遊戲だが、あはただしく追かけられた朝晩の後であつて見れば止むを得ないことと言つた方が適切だらう。昨日の夕方、店が一寸閑暇だつた時、何處かのお嬢さんが、子供にでもやるらしいお菓子を少しばか

り買つて、賢吉に「本當に忙しいでせうね。」「でも明日からはのんびりしますわ。」と言つたのがどうしても頭から離れなかつた。その時釣銭を何故あのお嬢さんに限つてわざ／＼手渡ししたのか、はつきりしないけれど、妙に氣恥しくほ／＼と顔を赤らめて見た。冷たい白銅貨をのせて指先が、弾力のある掌に觸れた時、白粉の香と混つて、生れて始めて女の秘密を嗅いだと思つた。對手が話しかけたのに、意氣地なく二度とも、「えゝ」とだけ答へたのを思ひだして、「まあよかつた」と譯の分らぬ溜息をついた。勝手な空想に自分ながらいぢらしいと考へる心もないではなかつたが、何だか幸福な未來が耳元で暖くさゝやいた。戀といふ字が大きく眼の前に浮んで來た。店の隅にある大きな鏡の前に立つて見たかつたけれども、櫛つたい感情がそれを制止して、唯きりつとした少年の姿を空中に描いて見た。それと一緒にあのお嬢さんの顔を思ひ出さうと努めたけれども、碌々正視もしなかつたので、不可能とは氣づいたものの媚びるやうな眼と笑ひかけさうな口元とが眞實であるかのやうに停止して動かなかつた。日は大分傾いて宵闇が匂ひ始める。柔かな匂ひである。

夕飯後賢吉は使にやられた。その歸途である。大分日の短くなつた秋の夜は、さはやかな中にも重厚なうねりを持つ。南國特有の植物の香が緩漫に街を流れる。長い橋の袂まで來た時、やつと乗り習つた自轉車の後輪がぶすりと音を立てた。その瞬間、待ちかまへてゐたものが來た時のやうなホットした安心が胸を横切つて、賢吉は自轉車から降りると、ゆつくりした步調でそれを押し始めた。こんな時間も時折はあつてもいいと考へてゐる彼の身体に快い、川風が包むやうにして吹いて來ると、何故だか、又あのお嬢さんの事が思ひ出すともなく思ひ出された。路傍の人の何でもない好意がこれ程迄に氣にかかる自分は馬鹿げた存在だつた。冷やかな理性が嘲笑つたとき、これも亦冷い感情がひり／＼と秋

きした。菓子屋の小僧の夢は強いられた夢である。悲しい欲望をほんのりと覆ふ夜に、小さな生活體が匍匐する。眞實を寫すといふ鏡は一体何を寫すのだらうか。若い異性の明朗な聲の響は無視と自嘲とそして刹那の音に過ぎない。でもあの體臭はそれと別個のものだらう。眞白なあやめを嗅いで見るがいい。奇妙な逃避だ。あやめが枯れて、黄色い牡丹が一輪咲いてふんはりと水の上に落ちる暗黒世界にちら／＼と光るものがある。澄みきつた星空は空ろな擴りだけれど不思議に重量を有する。星の一つ一つが消滅すれば一屬重くなつて來るだらう。そして怪げな濃淡が生ずる。むく／＼と動く土の香だ。その中に地上でたつた一つの魂がとけて行く。完全に委ねきつた法悅境だのにあきたりない不満が聲を立てる。みり／＼軋めく壓搾機に針でついた程の穴があつて微かな音を混ねる。淋しい味ひだ。でも背後は鬱勃たる緊張だ。お姉様のやうな人が肩に手をかけたら、とろ／＼とろけて行くかも知れないが、離れたら再び次第に凝固して仕舞ふだらう。妹のやうに可憐な娘が聲をかけたら、とろける前に飛散するだらう。合点のゆかないからくりがある。こちらからぶつつかつて取圍まれて霧香の包圍の中を踊り狂ふ夢を噛みしめると快い涙が頬を傳ふ。別の世界に住む人の紳士道と淑女道は百姓の子の通行を禁ずる。そのくせ道の上から挨拶したり世辭をふりまいたりするのは妙なものだ。尤もこれは彼等の通行券らしい。道の上からと下からと同情しあひ輕蔑しあふ。そして自分達の生活を持つ。恐らくは重苦しく惱み苦しみがきつづけてゐることだらう。今に天地を貫く大變動がおこつたら漠々として相對といふことのない世界が實現する。單調な淋しさだ。今のまゝがいい。随分長い橋だつた。この橋のやうに何時終るとも知れない人生を、車を押し乍ら幻を追つて行く。川底の薄氣味悪いさゝやきと押しかぶせるやうな夜空とに、常につきまとはれながら、抑へきれぬ欲望と希望とがせい一杯の飽滿を求める。やつとたどりついた此の岸のネオンサインは橋を渡る間絶えず人懷つこい誘惑と怪げな嫌惡を感じさせた。東京から歸省した時雄さんの机の上にあつた、マツチを呉れる所は一

体どんな人達が何の目的で入つて行き何をするのだらうか。赤と青との薄暗い光に照らされた眞黒い葉を持つ鉢植の向ふにはどんなことが演ぜられてゐるのだらう。あの鉢植の木が一度も目の目を拜まないまゝで枯れもしないのを見るとあの中には何か満みあふれてゐるものがあるに違ひない。ひよつとしたら空氣が、樹木が、ありとあらゆるものが、外來者から溢れてゐるものを吸ひ取るのかも知れない。

賢吉は、片鱗でもと入口を凝視し乍ら出来るだけ緩い步調で進んだ。全身の神經を眼に集めた積りで拔目なく、一寸した間隙でもありはしないかと注意したが無駄だつた。通り過ぎて見ると今更再び引かへず譯にもゆかず失望はしたものの、片隅に別の淡い失望がほんのりと感じられた。あの、邊りにただよふ濃厚な夜氣は賢吉のあこがれてゐたものとは大分隔りがあるのに氣づいたのだつた。自分の懷いてゐたのはやはりふんはりとした少年の夢だつたのが、はつきり分ると、急に赤や青の灯が毒々しいものに思はれて來た。そして、たとへあれが自分の夢に描いた世界だとしても、それは、菓子屋の小僧等の絶對に入ること許さないお金持の坊ちゃん達の歡樂場だと何とはなしに決めてしまつた。丁度お嬢さんが餘所の世界に住むやうに。

使から歸つて便所に行くと、傍の風呂場から女中のツタエと房子の笑ひ聲が聞けて來た。話の内容は分らないけれども一方が二言三言いふ間隔を置いて爆笑が續け様に起つた。明朗な若い女性の笑ひ聲を聞くと、自分もその中に飛込みたいやうな衝動をどうすることも出来なかつた。用を足すと風呂場の外から聲をかけた。

「ツタエさん。加減はどうだい。」

「賢ちゃんなの。有難う。上等よ。」

「房子さんは。」

「まあ、賢さんつたら、分つてるぢやないの、同じ風呂だもの。」

中では笑ひ聲が続いた。ガラス戸の隙から洩れ出る白い湯氣が、微かにゆらぎ乍ら、段々賢吉の身体を縛りつけて行くやうに思はれた。何時ものさつさと立去る自分と比べて考へれば考へる程、今日の自分は確かに變だと思ふ一面に、これが本當の自分だと思ひ直して見たり、子供の時とは違ふんだと一種の嬉しさを味つて見たりした。そして、もやもやと立上る湯氣の中に蠢く二人の若い女性を想像して見た。陶然として湯を楽しんでゐる豐滿な裸體が目に見えた。と、賢吉は自分でも驚く程の唐突さで入口の戸をがらがらと開いた。瞬間、釜の外に出てゐたツタエが狙へて、手拭の位置を直すのが見えた。湯に浸つてゐる房子のあきれた顔と、くつくつと忍び笑ひしてゐるツタエの顔とがぐるぐると、旋回した。ひつ込みのつかなくなつた顔に、物心がついて始めて見る全裸の處女のはち切れるやうな内体が、壓倒するやうな香を押しつけた。じりじりと迫る異性の感覺から逃れるために、何か言はうとしたが口が硬つてきけなかつた。

「おや、賢ちゃん、女の入つてゐる湯殿なんか覗くものではなくつてよ、とう／＼若い衆になつたのね、この聞こえ聲變りしたと思つてゐたらもう色氣を出すなんて、すご過ぎるわ。」

ツタエはかう言ひ終るとあでやかに笑つた。併し、その笑ひ聲には何處か淫らな響があつた。それまで呆然としてゐたらしい房子も、これと一處に一寸笑顔を見せた。だが、上氣したやうな顔をしながら尙も釜から出ようとはしなかつた。賢吉はたまらなく恥しい面持で何か辯解の言葉を見つけてゐるとツタエが続けて覆ひかぶせるやうに言つた。

「いゝのよ。併しか他人の裸姿が見たかつたら自分でも裸になつて來るものよ。そしたら何時でもね、房ちゃん。」房子の恥しさうな笑顔からツタエのむかつくやうな姿態に眼を移したとき、賢吉はひどい屈辱感に襲はれた。年の行かない初々しさが腹をたしかつたものゝ、もゐるやうな瞳はしつかりとツタエにそゝがれてゐた。それと一緒に氣まり

悪さがこみ上げて来て

「何だい腰ばかり大きくて。」

とやつと言ひ終つて頬のあたりに血の上るのを感じるのと同時に、ツタエが

「賢ちゃんの助平、」

と叫ぶのに混つて、房子の

「時雄さんに聞けるよ。」

と囁くやうな聲が耳に入つた。頬の血が急に消え失せて冷いものが背すぢを流れた。大變に悪いことをしたといふ自責の念が、こめかみの邊でびく／＼音を立てた。自然と趾音さへ忍ばせてゐる自分が大きな犯罪者のやに思へてならなかつた。耳元で「いぢやないの。」といふツタエの聲がした。

「賢吉か。」

茶の間の前まで來た時、中からの主人が呼びとめた。「はい。」といふ返事はおろ／＼として力がなかつた。

「一寸お出で。」

聞けたのだな、と恐怖が小言を豫想してひり／＼と身震ひした。そつと障子を開けて見た茶の間の案外のんびりした空氣に、當てのはづれたやうな安心がいふかしさを誘つた。

「まあそこへお坐り。忙かつたね。」

「いいえ、でも始めてのお祭で、てんでご舞ひして。」

「どうも御苦勞さん、これで店も暇になつたし、お前もうちに來てから一度も歸らないのだから、明日あたり乳を吸



つて來たらどうだね。」

「有難う御座います。本當にいいでせうか。」

「いゝとも。もう半年あまりになるだらう。お父さん達も會ひたいだらうて。」

「はう。」

「では明朝は又早いからお休み。」

「相済みません。お休みなさいませ。」

二三日忘れてゐた故郷のことが、心の全面を覆ふと、やはらかな夢が芽生ゐて行つた。主人の前を去つて、店員部屋に歸つた時、賢吉は居たたまれぬ故郷の吸引を全身に感じた。父と母と、幼なかつた時の情景がひつきりなしに往來した。喜びに満ちた兩親の愛撫に思ひつきり身を委ねてゐる自分の姿が眼に浮ぶと、その次には霞のかかつた白壁の土藏があらはれて來た。床に入つてからも、益々目のさへて來る自分を意識した。そして、仲々に眠りにつきさうもない腦神経の一部に、ツタエの裸体がとぐるを卷いてゐるやうな氣がした。

「おや、賢吉、どうして歸つて來たんだらう。」

母親がいぶかしげな顔で聞いた。

「うん、旦那が遊んで來いとお言ひやつたけん。」

「いゝ旦那だのう。せいだしてお店のために働かによ。おかよ小母さんに挨拶せんか。」

賢吉は始めて思ひ出した如く坐つたが、隣のおかよ小母さんに何と挨拶していいか分らなかつた。町では客に世辭をいふことも出來るのに村に歸ると挨拶一つ出來ないのが不思議だつた。仕方なく笑ひ乍ら頭をびよこつと下げた。

「幾つになつても子供だのう。」

母親が嬉しさに笑つた。

「なんの、しばらく見ぬ間に大きくなつたことか。もうお父つあんより大きくはねぬか。これで丈さんもみよさんも安心だのう。そろ／＼お嫁さんのほしい頃だろ。」

理由のない恥しさと憤りに似たものが賢吉の頭をかすめた。おかよ小母さんの言葉を引とつて母親が續けた。

「この子さへしつかりしてゐたら、わしらは早く隠居したいだよ。その中孫でも出来たら何十年ぶりかで安樂になるといふものだ。貧乏はしてゐてもこの子があるけんな。」

賢吉は知らず知らず目頭があつくなるのを感じた。

「わしはこれで歸るとしよう。賢坊や、ゆつくり乳を飲むだ。うちの峰坊も達者だけん遊びに來。」

「まあ、ゆるゆるしたら。賢吉も久しぶり歸つただから。」

今まで黙つてゐた父親が、おかよ小母さんと呼びとめた。

「また來るだ。」

おかよ小母さんが歸ると父親が言つた。

「旦那様が許しただか。」

「うん、忙しかつたけん遊んで來いちゆうて。」

「有難いこつちや。今度の祭には、おつ母と二人で行かうかと思つて、色々仕度までしただがな、お前も忙しうて邪魔になると思つたに、又にしうとやめただよ。」

「こうやつて今日歸つて来るんなら行かんでもよかつた譯だのう。」

「それにしても賢吉、小山の千坊は死んだぞ。あすこも不幸のつづきぢや。上の一坊は滿洲に出征して死ぬしな。」  
幸福感の絶頂にある父母にとつて、今自分がもしものことがあつたらどんなだらうと賢吉はうつむいた。

「お前も体格がええから兵に取られるかも知れんのう。戦争がなければいいがのう。小山の清公も、お國のためぢやと言ひ居るが、何と言つて親心はあきらめ切れんぢやらう。」

「千坊は何時死んだのか。」

「この間ぢや、一週間にもなるかのう。急病だつたぞ。お前も氣をつけて呉れんと。お前一人がたよりだからのう。」  
「ほんとに。旦那様の言ふことをよく聞いて早う一本立ちになるだ。」

その夜賢吉は一人で近くの氏神の社に行つた。

幼な友達の峯坊が今ひよつこり、いや自分が此處に來てゐることを知つて現れて二人が戀を語る。おかよ小母さんは達者だと言つた。昔の淡い記憶が、二人共大人になつた今再びくりかへされる。杉の原木が呼吸する。靜かな夜には靜かな愛情を包藏する。消え去つたゆらめきだ。かそやかな春の雨だ。しつとりぬれた暖い体温が香を發散する。そしてそれは石燈籠にへばりつく。二つの魂が銀杏の木蔭で舞踊する。小さな存在だ。惱みといふものが眞直ぐに續く。千吉が死んだ。眞白なあやめだ。一さんはお國のために死んだ。小山の小父さんは強い。自分の両親は泣くだらう。煙つたい百姓達の生活だ。でもやはらかな風が吹く。誘惑的な風だ。耽溺の南國にもほろ／＼と泣く小鳥が飛ぶ。

翌日、賢吉は、昨日來た道を、乗合自動車の運轉臺に乗つて走つて居た。急に鼻の穴の痒みを感じて指先でさはらう

としたが届かなかつた。それに不体裁だと思つたので急いで手を引込めると、今度は鼻の筋肉を色々に動かして見た。かすかな快感が鼻の奥で満足の合図をした。

ふと見たバツクミラーの、皺くちやになつて微動する自分の顔に氣づいて、賢吉はそつと顔の筋肉を平常の位置にもどした。そして大變な失策をしたかのやうに、鼻の痒みをじつところえ乍ら邊を見廻した。

がたごとと音を立て乍ら自動車は走る。